

# 名事研=ユース

NO.141

発行日 平成23年3月4日

平成22年度 第16回名古屋市立小中特別支援学校事務職員研究大会  
(名事研創立50周年記念大会)  
子どもたちの輝く未来と学校事務の明日へ  
~ともに創ろう!魅力ある学校づくり~

## 講演「学校事務のビジョンと行動変革」

国立教育政策研究所 初等中等教育研究部 総括研究官 藤原 文雄 氏

名事研創立50周年!

・第16回名古屋市立小中特別支援学校研究大会

平成23年 1月26日

・全体研修及び臨時総会

平成22年12月10日

ともに教育センターにて開催  
されました。

始めに、3つのことお伝えしたいと講演に入っていました。

西野カナの「if」の歌詞を参考にし、自分の公立学校の未来を考え、そこに居場所があるか、どのような貢献ができるかを学校職員や保護者、子どもともに見つめる視点が大事と述べ、そのための2つのキーワードをあげられました。

### 1 学びのイノベーション

これからは個人で学ぶのではなく、情報機器やいろいろな人の助けを借りながら学び、自分の能力を学校の中だけでなく、人とかがわりあう中で発揮することになります。そのためには、①対象世界に向き合う②人と向き合う③自分と向き合う、という3つの点を踏まえて協働的に学んでいく必要があります。

### 2 新しい公共

学校は子どもを通じて保護者・地域との人間関係を作ることができる場です。子どもだけではなく、大人も互いに学ぶことができる共同体となるのが未来の学校像となります。その中で学校唯一の行政職員として何ができるかという視点を持つことが必要です。新しいビジョンを得るために必要なことの多くは現場で学ぶことができます。そして、現場を離れて受ける研修においては、自分の実践を情報交換して互いに学びあうことが大切です。このように話すとともに、参加者同士で自分の実践を自慢しあう場を設けることをしながら進みました。

続いて、教員だけでなく、間接的な関わりでも教育の質を上げることができる、学びの環境をデザインすることが必要と述べられました。全体を見渡す立場であり、時間に縛られない行政職員は渉外担当を始めいろいろなことができる立場にあり、そのための手立てとして3つの点をあげられました。

### I 活動内容に着手する

学びのねらいと方法について考えていきます。

### II 空間に着手する

職員室のコミュニケーションの改善や教材教具の配置など教育環境のデザインを行ないます。

### III 共同体に着手する

コミュニケーションのあり方をコントロールすることで人の関係性をデザインすることができます。美馬のゆり・山内祐平著『未来の学び』をデザインする』をとり上げ、自分の経験にとらわれることなく、人と対話し、違う考えとも共存を可能とする空間を作ることができるような「学びのオーラ」を出し続ける必要があると述べられました。1年目の方を壇上にあげて話していただくなど、会場と一体となって進んでいきました。

そして、見渡す範囲を拡げるため、自分の仕事の流れだけでなく、授業の様子や購入した物品の使用状況を見るなど、学校の教育の流れを見渡すことが必要と続きます。準備をするだけで、汗を流さない職員は他の職員の信用を得ることができません。定型的業務から管理職と他の職員との調整的業務、学校全体の目標達成のための企画業務から周辺校や地域を視野に入れた統括的業務へと、経験年数に応じてジャンプしていく必要があると説かれました。

最後に、未来の学校を考え、学びに貢献するための業務を自分の経験から見出し、それを共有するには、市全体で経験年数に見合ったレベルを設定していく必要がある、また、互いに協力して学びのモデルであり続けようとする姿勢をアピールしていくことも大切だとまとめられました。



## 区事務研究会 研究報告

区研究報告は名東区、天白区が発表を行ないました。

### 名東区の実践と研究



名東区は、事務職員の世代交代に向けて経験の浅い若手職員に、ベテラン職員の豊富な知識や経験を伝えていく機会の場合として研究

を進めてきました。この研究をもとに、平成20年度以降は、グループ研究の1つとして職場内で先輩が後輩を研修する際に使用するための「OJT資料」の作成に取り組んできました。

「OJT資料」の作成にあたって、記載例やマニュアル・規則条例集といった充実している部分よりも、名古屋市で不

足していると思われる法的知識や経験によって身に付いた疑問点の解決方法を重点におき、平成20年度は「給与」と「経理」、平成21年度は「服務」をテーマに作成しました。

「OJT資料」は、前半部分は法的な知識を中心にまとめ、後半部分は、「だるまさん」、「うさぎさん」、「かっぱさん」の3つのキャラクターを作成し、擬人化させて、会話形式にまとめて、文章化するのが難しい部分を工夫してきました。

この「OJT資料」の作成を通して、研修とは先輩職員から経験の浅い、若い事務職員への知識や経験の伝承を一方的に伝えるだけでなく、お互いが学びあえる研修であるべきだと考えています。

今後は、規則条例の改正や制度変更に対応して、資料の改訂作業を行い、よりよい「OJT資料」を作成していきたいです。

## 研究発表 名古屋の学校事務をデザインする



[報告者] 榊原 功剛 氏 (名事研 副会長)  
毛利 和正 氏 (名事研 事務局員)  
[助言者] 本田 修三 氏 (名古屋市立前津中学校 校長)  
[司会者] 加藤 豊子 氏 (名事研 副会長)

### 実践報告 「名古屋の学校事務のいま ～学校間連携の実践を通して～」

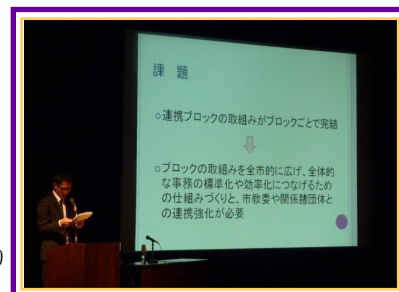
まず、研究部より実践報告が行なわれました。昨年度の研究の継続となる、職務を遂行する上での最適な5つの組織単位のうち「中学校区」に注目し、学校間連携ブロックの中で実践協力を募り、協力した3ブロックの実践から「中学校区」の発展性についての研究を進めました。

丸の内中・前津中ブロックではGoogleカレンダーを利用したブロック内の事務効率化を、沢上・宮中ブロックでは連携で作成した職員配付資料について、朝の打ち合わせで一声かけるなど、各学校が共通の認識を持って実践することの必要性を学び、桜丘・矢田中ブロックでは文書收受データの共有を通して文書管理の適正化と平準化を促進しました。どのブロックも教職員への共通理解・情報共有・平準化・効率化を目的として学校教育へ還元

できる内容でした。

また、研究部では学校間連携を活用した学校づくりの推進を考えるために、「物品の納入価格の比較」と「物品リストの作成」に取り組みました。

名古屋市全体を見渡すと、学校間連携に対する考え方や取り組みが共通理解されているとは言い難く、55ブロックが55通りの実践が行なっているというのが現状です。今後、学校間連携を職務として定着させるためには、どのブロックにも共通となる「学校間連携の標準」を示していく必要があり、今後さらに研究を進めてきたいと報告されました。



## 天白区の実践と研究

天白区では、学校間連携の目指す目標と名古屋市立小中特別支援学校事務研究協議会の取り組みは一致すると考え、学校間連携についての研究に取り組んでいます。若手の育成と支援など、それぞれのブロックの取り組みについて情報交換することで、運営に役立てています。研究を進める中で、区の事務研究会と学校間連携の役割の違いを明確にしていく必要があると考えました。学校間連携は、職務であり、構成人数が比較的少ないこともあって、協力体制が確立できれば、実務を中心とした情報交換や資質向上、事務改善が進めやすくなる一方で、その制度の特徴から学校事務職員のあり方等、実務を超えた研究活動を進める困難であることや、問題解決や情報収集、資料作成が十分にできないケースもあります。こういった課題を解決する活動が区学校事務研究会

の役割とするべきではないかと、市教委等も含めたそれぞれができる役割の関係について図で示して提案しました。



これまで個人の方では解決できなかった課題を、お互いの協力で解決できるように活動をしてきた中で、学校間連携が全校実施となって研究会の役割の一部は果たすことができるようになったが、解決できない課題もあることを踏まえた上で、今後も子どもたちの教育環境を整備していくという同じ目的を持つ組織として、お互いに支えあう形で活用していきたいと報告されました。

## 研究協議 「名古屋の学校事務のグランドデザイン」

続いて、事務局より「名古屋の学校事務のグランドデザイン」(以下「名古屋GD」)について基調提案が行なわれました。まず榊原氏から「名古屋GD」の全体像について説明されました。「名古屋GD」は「めざす像」とそれを実現するための戦略・実行策から成っており、戦略は学校事務職員育成の「人」、学校事務機能を高めるための学校事務組織確立の「組織」、そして「人」と「組織」の考えが成立するための「制度」の3つの観点を挙げています。さらに具体的な行動の整理として5年間の年次テーマを設定することでこの目標に向かって一丸となって行動できるようにすること、年次テーマがぶれないように「学校間連携の推進」「ミドルリーダー」「学校経営の機能を強化する」の3つの機軸について提案されました。

次に毛利氏が、名古屋GDの実行策について提案しました。全員で目標に向かって進むために必ず取り掛かる必須の行動「Minimum」を行動計画として、研究会組織、学校間連携、個人の役割を整理しています。今までは、大目標に向かうための方向性がそれぞれ違っていたのを、目的や課題を共有し、方向性を合わせるための中

間目標＝行動計画を作成し、実行することで研究実践などの共有ができ、これが研究・実践の連鎖となり名古屋の学校事務を推し進める原動力になると考えていると述べられました。

基調提案を受け、本田氏より学校事務職員の役割や実践に期待することとして学校間連携を生かして学校経営に係わる、「名古屋GD」により質の高い学校事務を目指し、子どもたちのための研究を行なう、他の職員と一緒に教育環境について考えるといった助言をいただきました。その後、会場との質疑応答では「名古屋GD」の疑問点について多くの意見や質問がされ、それについての意見や回答を行なうことで今後「名古屋GD」の策定を進める上で有意義な意見交換を進めることができました。

まとめとして、毛利氏は実践を通じて課題を検討し、見直すことでより良いものにしていく、榊原氏は新しい取り組みを形にしていくには情熱が必要だと静かながら熱い想いを語り、本田氏からは市教委に変えてほしいと待っているのではなく、こうしたいと提案するような形で現場と市教委が連携しながら取り組んでほしいと述べられました。



## 全体研修・臨時総会

### 全体研修

講演「グランドデザインを考えようー全事研及び各地区の進捗状況からー」

講師 全国公立小中学校事務職員研究会 研究部長 風岡 治 氏(一宮市立中部中学校)

はじめに、学校事務の方向性や共通理解を図るには、お互いの学校観や学校事務観のずれを認識しながら考えていくことが必要であることを話されました。そのことを踏まえ、意思決定の統合ルール、補完性の原理といった考え方にたった、組織開発・学校組織の活性化、学校マネジメントの必要性について紹介されました。

次に、学校事務のグランドデザインは、内外に学校事務・事務職員の存在を示すという目的を実現するための戦略論として、学校事務全体のあり方を中・長期的、総合的に見渡した全体構想であり、展望や戦略といった目的を描いたものと、実行計画や評価といった作戦を描いたものに分かれていると説明されました。

そして、全事研が策定した学校事務のグランドデザインは、平成17年中教審答申を踏まえた学校観を始めとするいくつかの基本的観点を押さえた「トータル・プロデュース」「事務長」「地区学校事務室」という3つのキーワードを元に7つの戦略を実行するなかで考えられており、全事研が示しているものは支部や市町

村、会員がそれぞれ考えていくためのマスタープランであると述べられました。

その後、平成22年2月25日に行われた全事研評議員会の実務報告会で報告された鳥取県・新潟県を始め、徳島県・広島県・島根県におけるグランドデザインの進捗状況について、各地区の策定の背景や基本的な理念・構想、具体的な行動シート・評価等の紹介をされました。

最後に、教育行政職員として、また学校職員としての両面での事務職員のあり方をベースに教育を創る事務職員像を描き、学校事務の経営機能を果たしていくことを目標とし、事務職員の強みとは何かを考え続け、それを生かして学校の中での役割を果たすことが必要であると話されました。



### 臨時総会 及び専門部活動PR

来年度に向けて名事研の事業を進めていくうえで必要な会則改正案を会員全体で審議するための臨時総会が開催されました。

現在の名事研を取り巻く様々な課題を解決し、組織力を高めるため、組織改編や役員の定数及び選出方法を見直す会則改正案が提案されました。会員396名中委任状提

出者117名を含む347名による審議後、大多数の賛同によって会則改正案は承認されました。

臨時総会終了後、専門部に入って良かったという気持ちを会員へ伝えるために、部を越えて結成されたグループによる専門部の活動PRが行われました。各専門部の特徴を生かした映像・BGMの入った様々な形によるPRで、部の活動内容や様子が紹介されました。紹介を通じて、仲間と協力することで得られる達成感や絆を感じ、より多くの人に専門部会の活動に参加してやりがいを見つけたいという思いが伝わりました。



#### 編集後記

今回の名事研ニュースは、PRをポイントの1つに置いて、「魅せる」ことを考えながら紙面づくりをしました。次号以降のレイアウトはまだ未定ですが、いろいろ工夫しながら作成していきたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。